
日本の青銅器文化と東アジア

The Bronze Culture of Japan viewed from East Asia

春成秀爾

HARUNARI, Hideji

[Abstract] In the Japanese archipelago, sharp-edged stone tools and weapons were replaced by iron implements. Bronze tools never become the primary type. However, one may call the unique culture of the Yayoi period (5th or 4th B.C. to 3rd centuries A.D.) , in which bronze implements had special applications, a bronze culture. Bronze implements appeared in Japan during the Yayoi period when rice cultivation began in earnest. The original source of the Japanese bronze tools was the Central Plain of China and the direct source was the Korean peninsula.

In northern Kyusyu, practical weapons brought from the Korean peninsula were used as weapons and as burial accessories. However, shortly thereafter, bronze implement became progressively larger. Blades and sockets were no longer affixed and the implements lost their function as weapons. Iron swords and daggers came to be used as weapons. Bronze halberds and socketed spearheads were made larger and ceased to be used as burial accessories in graves. They came to be buried in the ground on the outskirts of villages and on the slopes of hills and mountains at the edges of plains.

Bronze bells representative of the bronze implement of the Kinki and Tokai regions are very different from those of their original sources in China and the Korean peninsula. From the beginning, Japanese bronze bells were large and become progressively larger. As they approached the zenith of their size, their production was suddenly halted. They all were patterned and some had drawings on them. The figures drawing the bronze bells are mainly deer, heron, cranes and human figures. According to ancient Japanese literature, folklore and lifestyles, deer represented the spirit of the land, cranes and heron represented the spirit of rice and human figures represented the ancestors. One may conclude that these bronze bells were religious implements to sanctify the most important gods of the era, the spirits for rice crops; land, rice and the ancestors.

In the Central Plain in China where bronze bells originated, they were religious implements which beckoned the gods by the sound and radiance of metal. This characteristic did not change as the bells were transmitted through China's North-eastern region (Liaoning) and across the Korean peninsula. However, during the transition bronze bells ceased to be rung and came to be solely objects to be looked at. The large bronze bells became regalia which held a spiritual meaning. They became the symbols of groups. This also influenced the people of northern Kyusyu who came to possess weapon-like regalia and began the trend toward larger bells.

The bronze bells were used as enshrinement implements passed from generation to generation over time. Finally, they were buried in the ground according to a certain method. The bells'burial locations are the same as those at which bronze implement was buried in northern Kyusyu. These are locations that can be considered the border between the human world and the natural world. If one estimates the period of the burials from the beginning of the first century A.D. to the latter half of the second century, this corresponds to periods of crisis and warfare in the Japanese archipelago. These burials were probably meant as offerings of the most important symbol of one's group to the gods as a prayer for victory in battle.

Only specific types of Japanese bronze implement, such as bronze swords, spears and bells for use in rituals and as group symbols, was produced in large amounts. The raw materials for bronze implement were obtained first from the Korean peninsula and later from northern China. The center of bronze implement production was

in the northern Kyusyu, Kinki and Tokai regions. It seems there was also production in northern Shikoku and the San'in regions. In the Kinki region, production was in northern Osaka, southern Osaka and Nara. There are differences in shape and size. The value of bronze religious implements was extremely high. The distribution of bronze bells had the significance of creation of a common spiritual world with specific rituals employing bronze bells. Moreover, the party which bestowed the bells imposed some sort of debt onto the party which received them. The fact that bells distributed in the same area were created by several production groups suggests there may have been competition among the production groups for distribution.

As bronze ware shifted from general religious implements to group symbols, the geographical consolidation of groups was accomplished. That is to say fate and the rise and fall of political power was combined. Production of both the bronze spears of Kyusyu and the bronze bells of the Kinki and Tokai regions ceased immediately after they reached their largest dimensions. That was due to the fact that a final outcome to the battles for political power had been reached and a new symbol was created. Strongly connected to the development of the political world and based on the condition that raw materials could not be obtained at an individual's expense, bronze implement of Japan developed as a group symbol. Therefore, bronze culture of Japan was different from those of China, the Korean peninsula and Southeast Asia.

はじめに

人類の歴史は、利器とくに斧と剣の材料の変遷にもとづいて、石器時代、青銅器時代、鉄器時代の三時代に区分される。ところが、日本では石器時代からいきなり鉄器時代へと移行し、青銅製の利器をさかんに用いた青銅器時代を経なかった。しかし、日本でも青銅器の発達を弥生時代に確かにみた。

日本列島に青銅器が現れるのは、稲作を本格的に始めた弥生時代のことである。青銅器は弥生時代の前期末ないし中期初めごろは、朝鮮半島から輸入した少数の剣や戈を武器として用いたけれども、中期後半になると利器と武器の多くは石と鉄で作られ、青銅器はもっぱら祭器として発達した。かつて弥生時代の西日本を「銅剣・銅矛文化圏」と「銅鐸文化圏」の対立という構図で捉えたのは、日本の青銅器文化の特殊性をよく表わしている。銅鐸・銅矛を典型とする青銅器をもっぱら祭器として特別扱いした弥生時代の特異な性格をもつ文化を、象徴的に「青銅器文化」とよぶことは許されるだろう。弥生時代の青銅器の直接的な祖型は朝鮮青銅器文化に求められ、さらにその淵源は中国中原の殷周青銅器文化にある(図1)。

青銅器の原料である銅・錫・鉛を、朝鮮半島、中国から入手し、祭器に特化して発達させ、鉄は朝鮮半島から原料を得て当初は工具として、遅れて農具や武器として、実用品として普及した。石器時代から金属器時代への移行が、自前の金属生産ではなく、海外に依存して実現したところにも日本の特性があった。

1. 弥生時代の青銅器

1 日本青銅器の源流とその種類

アジアの青銅器文化の淵源は、中国の黄河流域にある。そこでは、約5000年前の新石器時代龍山文化期に純銅・鍛造のナイフなどを少数だが作り始めている。そして、4000年前の龍山文化末期になると、鑄造した鈴がすでに現れている。

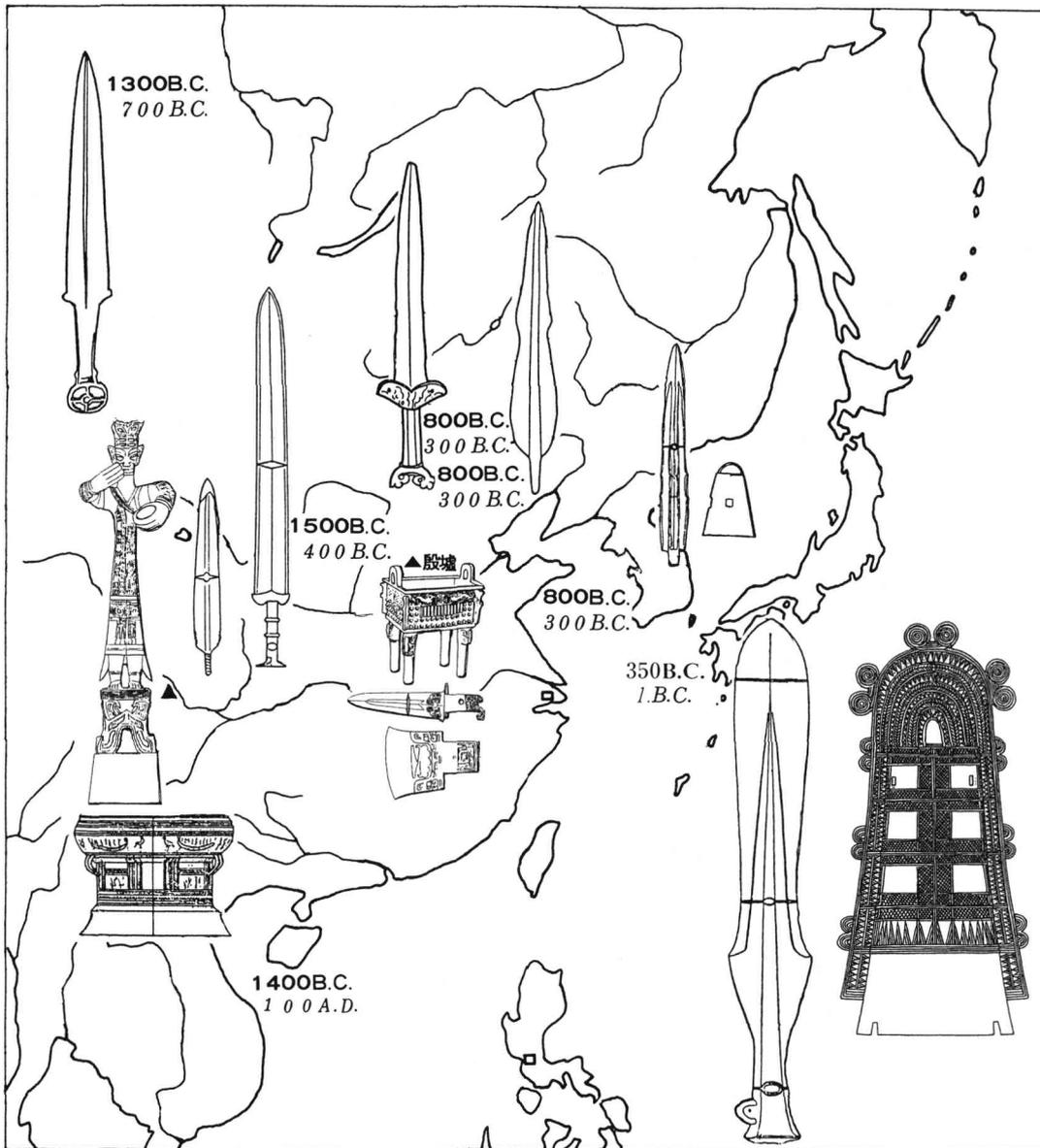


図1 アジアの青銅器文化

ゴシック文字は青銅器文化の始まり（日本は青銅器製作の始まり）、イタリック文字は鉄器時代の始まり（岩永省三 1980『青銅の武器展』図録解説を参考にして作成）

Fig.1 Bronze cultures in Asia. Bold characters indicate minimum dates for bronze manufacture for Japan and the beginning of the Bronze Age in other areas. Italic characters indicate minimum dates for the Iron Age.

約3800年前の夏代，二里頭文化期になると，青銅・鑄造の斧・刀子・鑿だけでなく爵など青銅容器の生産が始まる。

そして，約3500年前の殷代になると，祖先神を祭る宗廟に供える礼器の鑄造をさかんに行うようになる。それは，食器9種，酒器14種，水器3種，楽器7種からなる。ちなみに「鼎談」の語の元になった鼎は食べ物を煮るための3ないし4本脚の食器であって，最大の鼎は，重さ875kgの巨大なものである。この時代には，他に青銅で武器4種，武具2種，農具2種，工具3種，車馬具14種を作った。約60種の大小多種多様の青銅器であるが，そのなかの中心をしめるのは，あくまでも礼器である。これらの青銅器を飾る紋様として発達したのが，奇怪な顔を意匠にした饕餮紋である。

これらの青銅器は，殷・西周の王朝の版図の拡大に伴って周辺部にひろがり，遼寧西部では礼器まで作っている。これが遼寧東部になると，武器，装身具，車馬具だけになってしまう。そして，朝鮮半島に伝わったときは，青銅器の組み合わせに大きな変化はないけれども，馬車の風習を採用しなかったために，車馬具は実用から離れた意味不明の模造品に変わっている（図2）。劍・戈・矛と鏡・鈴はセットで用い，墓に副葬するのが普通である。防牌形銅器・八珠鈴・双鈴は馬具の変化したものである。防牌形は遼寧地方で馬具の頭絡飾りであった人面銅牌に由来し，八珠鈴は鈴を付けた防牌形銅器から生まれた。双鈴は鑣の両端に鈴を付けることによって生まれた。

弥生時代の青銅器は，朝鮮半島の青銅器文化に由来する。しかし，朝鮮半島と比較すると，種類はもっと減っている（図3）。斧と，車馬具の模造品は作っていない。鏡は朝鮮半島から運んで来たものが少数あり，のちに中国の鏡を模倣した小型品を作っている。代表的なものは，銅劍・銅戈・銅矛と銅鐸があるが，他にも若干ある。それらのうち日本での製作が確実なものは，武器および武器形：劍・戈・矛・鏃，祭具：鐸・鈴・鏡，装身具：腕輪2種・巴形銅器，耕・工具：鍬・鉈，その他：石突，用途不明品（佐賀県吉野ヶ里遺跡の鑄型など）の約15種類である。しかし，ある地域の一時期をとったばあい，その種類ははるかに少ない。これらのうち，日本独自といえるのは，腕輪の一部，巴形銅器，銅鍬だけである。初期の劍・戈・矛の鑄型は，佐賀・福岡から見つかっている。鑄型に彫り込んだ形・大きさを見ると，朝鮮半島から持ち込んだ製品とよく似ており，両者の区別はむつかしい。列島での青銅器の製作は，技術をもつ工人が朝鮮半島からやってきて始まったのであろう。

近畿地方の青銅器は，北部九州と比較すると，種類がもっと少ない。弥生後期は鐸と鏃にほとんど限られていて，小型鏡もとるに足りないほどの数にすぎない。青銅器といえば，一つの集団の構成員の多くが知っているのは，例えば銅鐸だけであったというような，特殊な青銅器文化に変わっていた。

2 青銅武器から武器形祭器へ

北部九州では，青銅の劍・戈・矛は初めのうちは朝鮮半島からもたらされた現物を故地と同じように武器として使っていた。人骨に刺さったのこっている先端部の破片や，刃を研ぎ直した痕跡はその証拠である。しかし，朝鮮半島から青銅器の製作工人が渡来し，北部九州でも鑄造が始まると，先端は鈍化し刃付けも不熱心になるなど，武器としての要素は後退していく。やがて，大型化を指

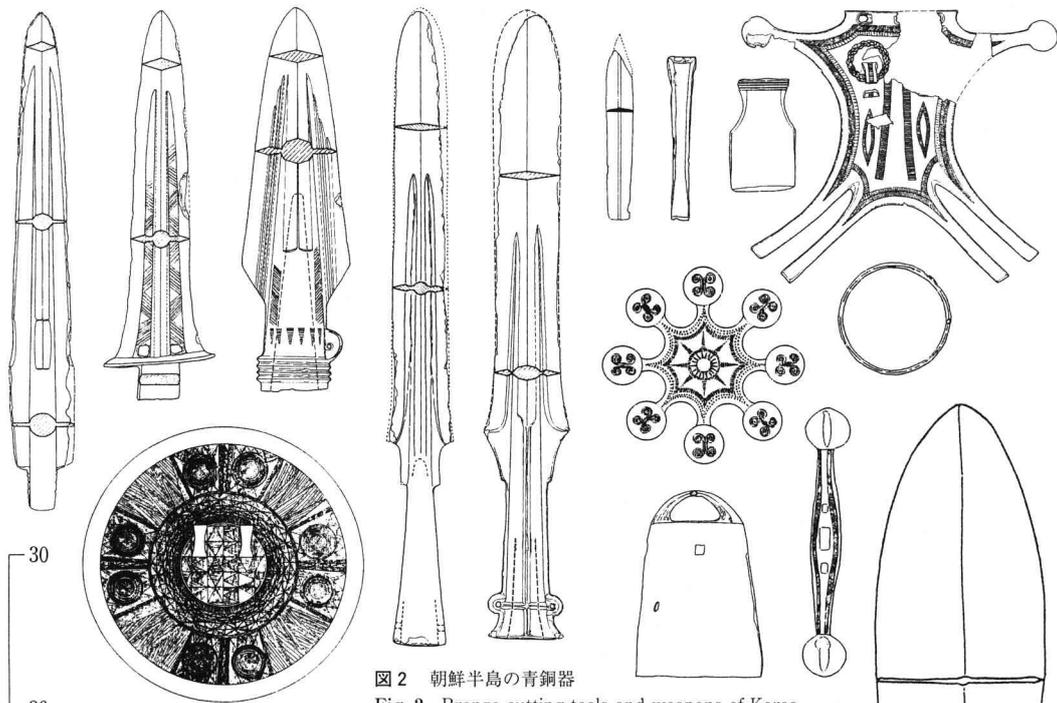


図2 朝鮮半島の青銅器
Fig. 2 Bronze cutting tools and weapons of Korea

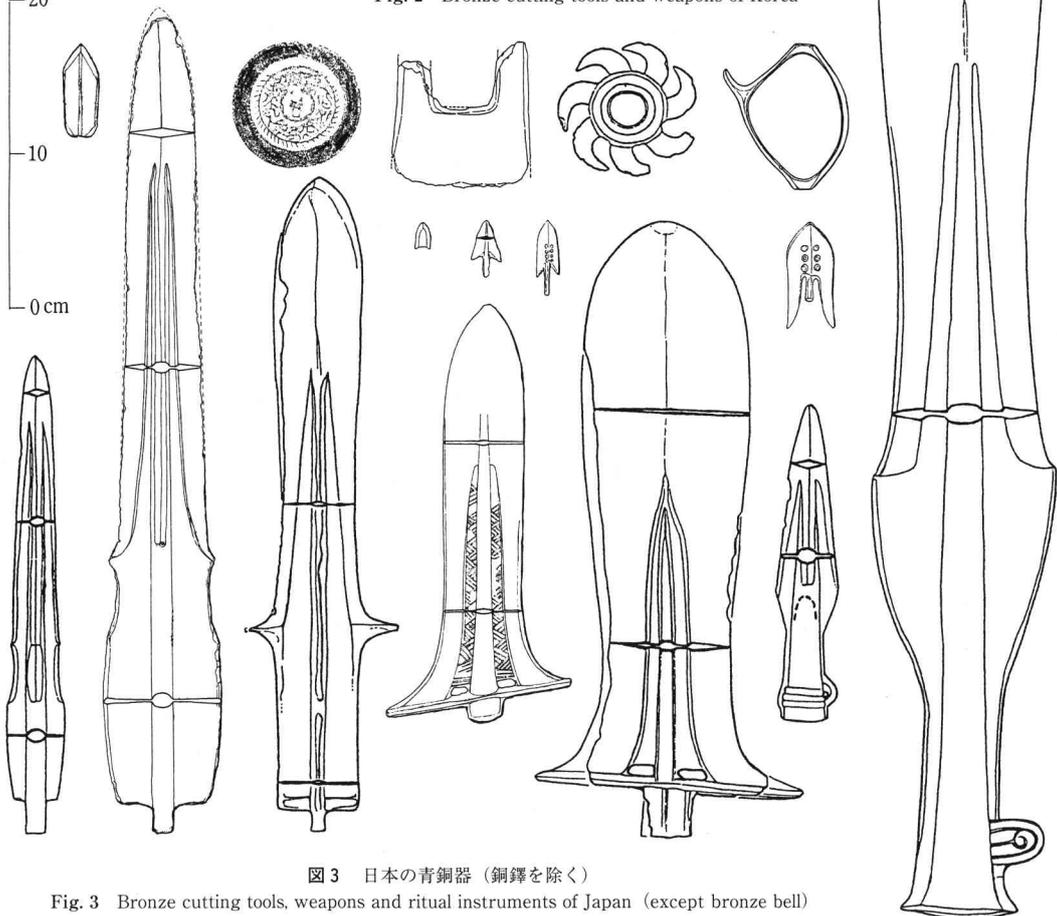


図3 日本の青銅器 (銅鐸を除く)
Fig. 3 Bronze cutting tools, weapons and ritual instruments of Japan (except bronze bell)

向する一方、柄をつけることを放棄し、祭器としての道をまっしぐらに走る（図4）。個人用の武器から集団の祭器への変質である。

鉄器は弥生前期末ないし中期初め頃から、中国戦国時代の燕の系統の鑄造鉄斧が九州を中心にもたらされるようになり、そのまま使うか、破片を再加工して板状の斧や鑿・鉞に作り変えて使う[村上 1999]。中期中頃ないし後半頃から、鉄の素材を朝鮮半島から得て日本列島で加工することがさかんになると、板状鉄斧・袋状鉄斧・鑿・鉞・刀子・鉄刃先（鋏・鋤）・鎌・釣針などの鍛造鉄器が現れ、次第に各種の石斧、穂摘具など石器に取って代わっていく。さらに、中期中頃ないし後半になると、鉄剣（長剣・短剣）・鉄戈・鉄矛・鉄鏃が普及し始め、武器の面でも石器を駆逐していった。青銅武器の祭器化は、鉄器が普及するよりもやや早い時期に始動するけれども、鉄器のあり様と無関係ではないだろう。なお、銅鏃だけは後期にいたっても実用品として使用され、古墳時代になって、儀器化していった。

日本では青銅の剣・戈・矛は北部九州でもっばら発達したけれども、近畿でも剣（細形）・戈（大阪湾型）の製作を少数おこなった。また、四国北岸では剣（平形銅剣）、出雲でも剣（中細形）を生産した。しかし、それらは武器形祭器として発達した。

3 銅鈴から銅鐸へ

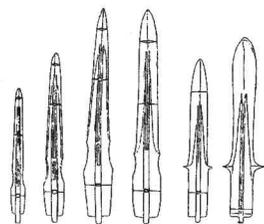
近畿地方を中心に分布する銅鐸を、日本では奈良時代にすでに「銅鐸」と呼んでいた。中国では元来、鐸は有柄有舌のカネつまり身の内部に舌（棒や丸）を下げ、柄をもって鳴らすカネ、鈴は有鈕有舌のカネつまり身の内部に舌を下げ、鈕で吊り下げて舌または身をゆすって鳴らすカネをさしていた。事実、同じ銅鈴を中国と北朝鮮では「銅鈴」と呼び、韓国と日本では「小銅鐸」と呼んでいる。日本の銅鐸も本当は銅鈴と呼ぶのが正しい。

中国では、鈴は最初に6000年前の新石器時代に土製品が現れ、3900年前（龍山文化末）に純銅製品に置きかわり、3700年前（夏代、二里頭文化）から青銅製品が普及する。中国に現われた最古つまり世界最古の青銅鈴は高さ8cmほどの小型品で、人の腰につけて使ったようである。3500年前（殷代）には、人の腰、馬や犬の頸、棺にかぶせる布の四隅などにつけ、3100年前（西周代）になると、青銅容器の内側につけたり、戦車にたてた旗にも鈴をつけた（図5）。人、人を先導する犬、人を乗せた戦車をひく馬、器物につけた銅鈴は、金属の音と光の力で邪悪を斥け神を招いて人を護る任務をもっていた。

朝鮮半島には中国東北部から戦国時代に銅鈴が伝来する。北アジアのシャマンは20世紀初めまで、青銅の鈴や鏡などを身に着けて身体をゆすって鳴らし、神懸かりの状態になるのを助けていた。朝鮮半島の青銅器時代にも、凹面の多鈕鏡、鈴をつけた杖などがあるから、銅鈴も司祭者の身体に着け、同じような役目をはたしていたのであろう。彼らが近代のシャマンと違う点は、青銅武器を常にもっており、「戦うシャマン」という性格をおびていたことである[甲元 1989]。朝鮮半島に伝わった銅鈴は、やや大型品も現われた。韓国の扶余市合松里から見つかった銅鈴は、高さ16.1cmあり、それに伴って、身の内面の裾に突帯をつけて青銅の棒（舌）が接触するように工夫している。鑄型の外型と内型とを支える型持ちの一つは身の中央にあった（製品には孔がのこる）。

前4世紀ごろ海を渡った銅鈴は近畿地方で突然、高さが20cmをこす大型品を作るように変わっ

銅劍
Dagger (*Doken*)



銅戈
Halberd (*Doka*)

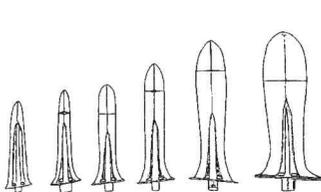
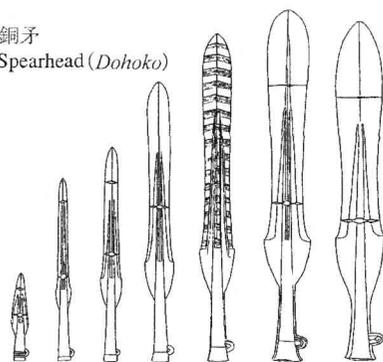


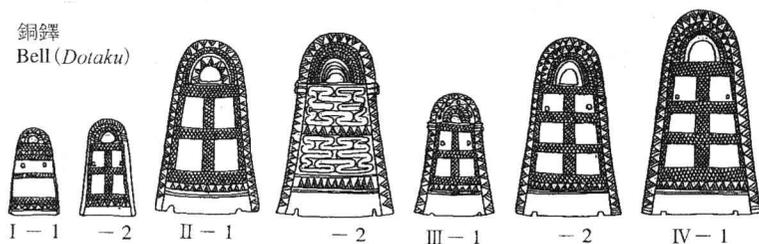
図4 弥生青銅器の変遷

Fig. 4 Chronology of the Yayoi bronze ritual instruments

銅矛
Spearhead (*Dohoko*)



銅鐸
Bell (*Dotaku*)



前350年
B.C.

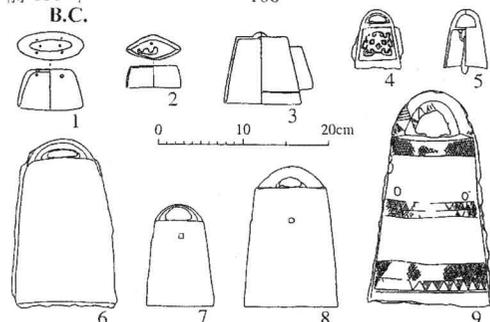
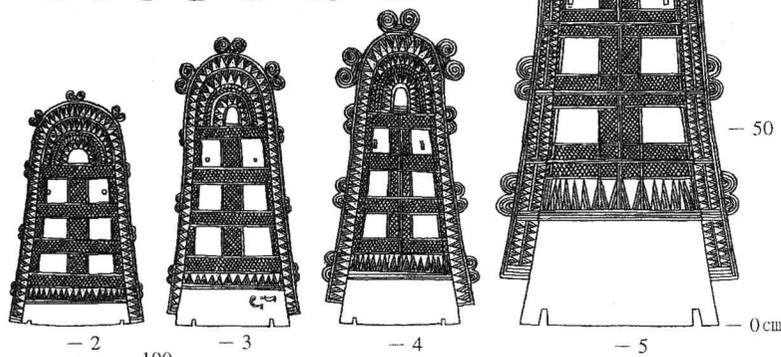


図5 土鈴から土鈴，銅鐸へ
China (1~6), Korea (7·8), Japan (9)



100



島根・神庭
Kanba, Shimane

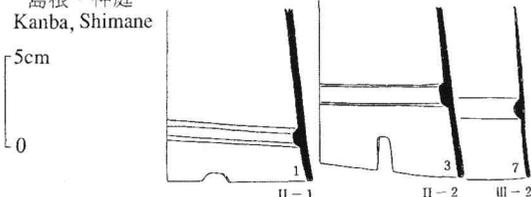
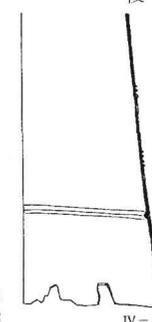


図6 銅鐸の内面突帯の磨滅土
兵庫・神岡
大阪・西浦

後200年
A.D.



兵庫・神岡
大阪・西浦
Nishiura, Osaka

た。大型化に応じて型持ちは身の左右においた。そして、鈕にも身にも文様を施した(図5)。出土地不明・東京国立博物館蔵の高さ22.3cmの銅鐸は、これまでに知られている最古の銅鐸であって、鈕に鋸歯文、身に4区袈裟禪文を施し、朝鮮半島の銅鈴から完全に独立している。銅鐸はその後、大型化をいっそう進め、その祖先とかけはなれた巨大な神器に変質する(図4)。

日本の銅鐸は、死者に副葬することはなく、丘の斜面などに単独で埋めることが多い。人の身体から離れ、祭りの場で鳴らし、最後に土中に埋納したのである。

音を発する銅鈴=銅鐸は近畿地方、遅れて東海地方で作っている。また、少数は四国、出雲でも造ったようである。銅鐸は、途中から大形・装飾過多の道を歩み、音を発しない祭器へ、さらには神器すなわち象徴へと転じた(図6)。

2. 青銅器の祭り

1 青銅武器

弥生中期初めの福岡市吉武高木遺跡3号墓に納められていた銅剣2本・銅戈・銅矛と管玉(碧玉)・勾玉(ヒスイ)、銅鏡(多鈕細文鏡)のうち、青銅武器と青銅鏡は、のちの九州の王墓の副葬品と変わるところがないので、北部九州に現われた最初の王ともみなされている。この組み合わせは、同時期の朝鮮半島の首長またはシャマンの持ち物と共通する。勾玉・管玉以外は朝鮮半島からの舶載品で、埋葬された人は朝鮮半島からの渡来者であった可能性も考えられている。武器は戦う人、銅鏡はシャマンの象徴である。この時期はシャマンと王とが未分化の段階といえるかもしれない。

稀少かつ高価な青銅武器は、武器であると同時に権威を誇示する儀器となった。そして、祭りの場でそれを振りまわせば祭器となった。しかし、日本列島では、青銅武器は、銅鏃を除くと、祭器の方向へのみ突き進んだ。弥生時代は稲作農耕の時代だからといって、武器・武器形祭器を用いた祭りがすべて農耕にかかわりをもっていたと考える必要はない。

奈良県東大寺山古墳から見つかった「中平□年」の銘文をもつ鉄刀には、百鍊の立派な刀は、天上では星座の神が応え、地上では不祥事を避ける、とある。奈良県石上神宮蔵の七支刀の銘文には、「百兵を辟ける」つまり、あらゆる種類の兵器を斥ける、とある。これら銘文をもつ刀剣は、文字のもつ強い呪力もあずかって武力の象徴となっている。

文献上に武器が登場する場面をみよう。天皇の夢に現われた神人は、赤盾八枚、赤矛八竿をもって墨坂神を祀り、黒盾八枚、黒矛八竿をもって大坂神を祀っている(崇神紀)。大和への入口の墨坂と大坂を護る塞の神に武器・武具を奉納することによって、天皇、そして大和を護ってもらうという考えである。壬申の乱のさなか、大海人皇子側は神日本磐余彦天皇陵に、馬と種々の兵器を奉っている(天武紀)。始祖が馬に乗り武器をもって味方してくれることを期待しての戦勝祈願である。武器の祭りは、敵や邪悪なものを倒す目的をもっている。弥生時代の青銅武器を用いた祭りや武器形祭器の奉納も、同じような意味をもっていたのであろう。

2 銅鐸の絵

銅鐸の直接的な起源は朝鮮半島にあるが、彼地では無文であるのに対して、近畿の銅鐸は最初か

ら装飾文様をもっている。その点で、銅鐸は弥生人の意向が加わって創造された青銅器である。やがて、銅鐸の表面に絵画を描くことも始める(図7)。

銅鐸はこれまで佐賀県から太平洋側では静岡県まで、日本海側では石川県まで見つかり、その数は約470個に達する。そのうち絵画をもつ例は約60個ある。銅鐸を用いた祭りを探るには、銅鐸に描いてある絵について考察するのがよい。画題を多い順にあげると、鹿を描いた銅鐸26個、サギ18個、人15個、トンボ10個、スッポン9個、魚9個(以下略)である。

鹿は、縄文時代には猪と並ぶ狩猟対象の双璧であったのに、西日本の弥生時代の遺跡から鹿の骨が見つかることは少ない。銅鐸の絵には鹿を捕らえる情景がある。鹿狩りは衰退したのに、なぜこのような絵を描いたのか。

8世紀に編纂された記紀や風土記の記事を参照し、さらにはこれらの動物の特徴を知ると、農耕とのかかわりが深いことを理解できる。

仁徳天皇が生前、自分の墓を造る土地を見に行ったところ、目の前に鹿が飛び出してきた鹿が突然死んでしまった。調べてみると、耳をモズに食い裂かれていた。そこで、百舌鳥耳原と名づけ、陵を築いた(仁徳紀)。白鳥陵の陵守を廃止しようとしたところ、陵守が白鹿になって走り去った(仁徳紀)。こうしてみると、鹿は土地の精霊である。なぜ鹿は土地の精霊とみなされたのか。

鹿の特徴は角にある。雄鹿の角は春に生え始めて秋に立派に成長する。そして、冬になると、落ちる。秋の交尾期に、雄同士が雌を奪い合うための武器が角である。稲は春に種をまいて秋に稔る。鹿の角の成長は、稲の成長とイメージが重なる。こうして鹿の角と稲は同視される。銅鐸の鹿は、意図的に角を表現していない。生きている鹿の腹を割いて稲の種をまいたところ、一夜のうちに苗になった(播磨国風土記)。短期間のうちに角を成長させる霊力をもつ鹿の体は、こうして肥沃な土地にたとえられた。

銅鐸には、鹿と狩人の構図が少なくない。しかし、弥生遺跡を発掘しても、鹿の骨が見つかることは少ない。鹿狩りは神事としてのみ存続したのであろう。狩人も単なる人ではなく、稲作を始めた偉大な祖先であり、土地=自然の暴威から稲を守る祖霊を象徴していると考えてはどうか。

その一方、サギは、春に水田に水をひくと流れ込んでくるフナ、コイなどをたべるために、水田に白く美しい姿を現す。銅鐸のサギは嘴にフナをくわえている。稲とともに水田にいるサギは、稲にたとえられたのであろう。鹿は土地の精霊、サギは稲の精霊、そして人を祖先の霊とみなせば、三者を主役とする神話があり、それにもとづいて弥生時代の稲の祭りがおこなわれたことを想定できる。

銅鐸は稲の祭りの場で鳴らし、神を招く祭器であったという想定は、こうして導かれる。

高知県兎田八幡宮銅剣には、鹿、サギなど銅鐸と共通する絵画を描いてある。また九州で作った銅戈には、鹿や人の顔を描いた例がある。銅鐸と銅剣または銅戈をいっしょに埋めた例もある。鐸と剣・戈はちがっても、それを用いる場は共通していた可能性を考えることができる。弥生青銅器は、武器形祭器のばあいも武力によって敵と戦うというところから出発しながらも、農耕祭器という側面をもっているのが、一つの特徴である。

銅鐸の絵は、当初の画題の原作を模倣しながら基本的に描き継いでいる。その過程で、理解できない絵については作者の誤解や解釈が加わって変化していく。銅鐸の絵のなかでもっとも重要な構

図は、鹿を押さえている狩人、魚をくわえているサギ、脱穀している人である。神戸市桜ヶ丘神岡5号鐸には男を○頭、女を△頭に表現し、男が女を棒で殴打するのを別の女が止めようとしている絵がある。しかし、この絵に先行して描かれた福井県井向1号鐸の絵では、戈をもつ背の高い人が剣をもつ背の低い人を攻撃している。神岡5号鐸の争いの絵は、絵を描く人が原作を新しく解釈した改作の1例である。

弥生土器に描かれた絵は、奈良県唐古=鍵遺跡と清水風遺跡からの出土品を主に、これまで約300例見つかっている。清水風遺跡で発掘された土器は、絵の全体像がわかる珍しい例である。左から背中に矢が刺さった鹿、魚4匹、戈と盾をもつ大小2人、柱数の多い建物を描いてある。鹿は土地の精霊、それと向き合う魚は水の精霊であろう。戈と盾をもつ人は、高床の倉庫の稲穂を守ろうとして戦っている。相手は、敵集団なのか、それとも邪悪なものなのか。

興味深いことは、戈と盾をもつ人の構図が中国山東省の層山遺跡出土の殷代青銅鼎の記号に酷似する事実である。戈を執り盾を掲げる人といえば、『周礼』(夏官)に出てくる魍魎を撃つ方相氏についての記述を思い起こす。弥生土器や銅鐸の戦いや争いの絵、遺跡出土の木製戈や木製盾は、中国から方相氏の習俗が伝来していることを示唆しているように思う。青銅器や土器の絵を農耕儀礼とのみ結びつけて解釈するのは、適切ではないことになる。

朝鮮青銅器文化では、青銅器や土器に絵を描くことは稀であった。慶尚南道大田付近出土と伝える防牌形青銅器に描いてある絵は、その数少ない例である。片面に鋤・鋤で畑を耕す男、収穫して壺に収める人、反対面に番の鳥が木枝にとまっている。鳥は小禽の類であって、サギではない。鳥装の司祭者が穀霊の運搬者である鳥を招き豊饒を予祝する祭りの情景をあらわしているとする見方がある〔金関 1985〕。魏志馬韓伝にみえる「蘇塗」を鳥杆、「鬼神」を祖霊とみなしての推定である。他に鹿や虎、人の手などの絵をあらわした青銅器が知られているけれど、その意味の解明までにはいたっていない。いずれにせよ、日本列島の青銅器文化の故地であった朝鮮半島における信仰の体系は、日本列島に伝来したときに変容したと考えざるをえないだろう。

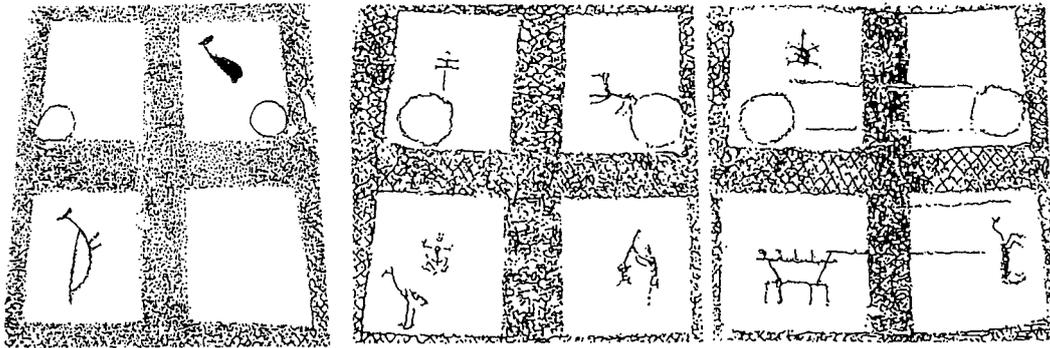
朝鮮青銅器文化の直接の起源である遼寧青銅器文化では、人の顔、蛇(サンガクマムシか)、鳥(イヌワシか)が青銅器にあらわされた主要なモチーフである。それぞれ先祖、土地の主、天空の主を象徴とする信仰の体系をもっていたのであろう。

このように、青銅器文化として系譜関係は明らかであっても、信仰体系はそれぞれ故地とはすでに異なっていた。弥生青銅器文化の信仰体系は、列島特有の風土の中で水田稲作を至上の生業と選んだ人々が新たにつくりあげた独自のものであった。

3 銅鐸の埋納

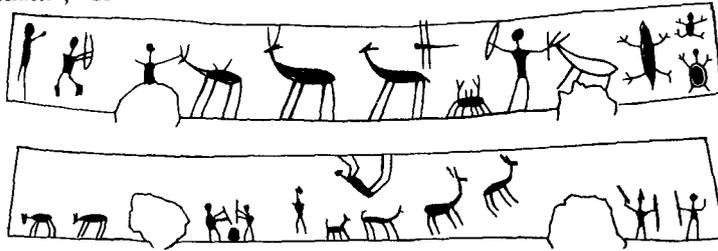
1996年、島根県加茂町岩倉遺跡からⅡ-1式からⅣ-1式までの銅鐸39個が見つかった。埋めたのは最新の銅鐸を作ってもない1世紀のことと推定される。発見地は、せまい谷の最奥に面する山の斜面で、大きい銅鐸に小さい銅鐸を入れ子にして、鱗を上下にして埋めていた。

神戸市桜ヶ丘神岡遺跡ではⅡ-1式からⅢ-2式までの銅鐸14個と銅戈7本が見つかった。それらは六甲山の南斜面、標高244mの尾根の山かげに埋めてあった。そこから直線距離で東へ6m、比高2m上、または西南西へ57m、比高4m上に眺望のよい高まりがあり、大阪湾を眼下に見るこ

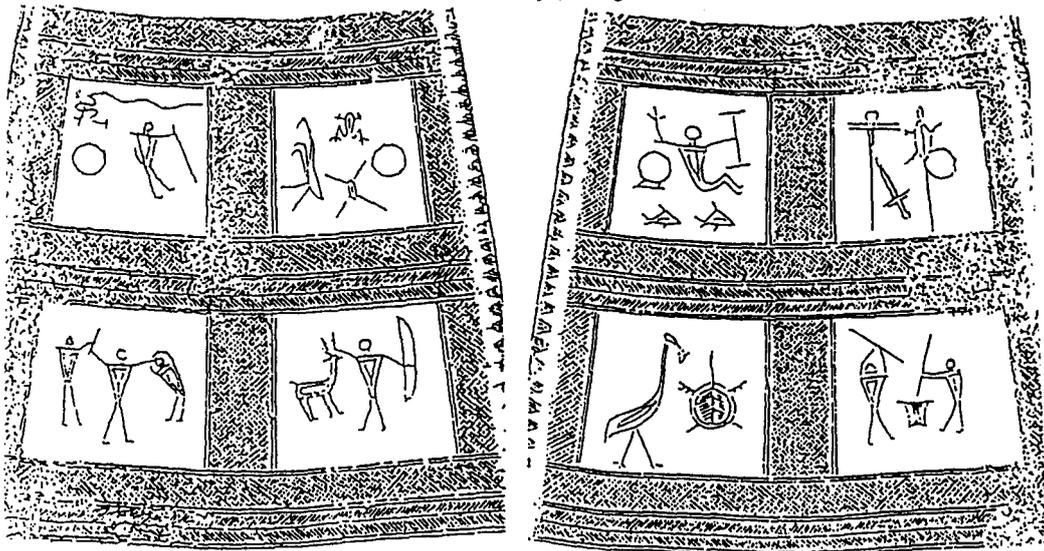


I-2 式 岐阜・十六町
I-2 Jyurokucho, Gifu

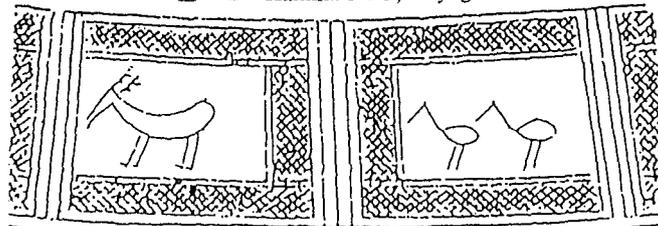
I-2 式 福井・井向2号
I-2 Inomukai No.1, Fukui



II-1 式 滋賀・新庄
II-1 Shinjo, Shiga



III-2 式 兵庫・神岡5号
III-2 Kamika No.5, Hyogo



IV-3 式 静岡・悪ヶ谷
IV-3 Akugaya, Shizuoka

図7 銅鐸の絵 Fig.7 Pictorial representations on the Dotaku

とができる(図8)。

鳥根県斐川町神庭西谷には、Ⅰ-1式からⅡ-2式までの銅鐸6個と中広形銅矛16本、中細形銅剣358本を6mの間隔をおいて2個所に埋めてあった(図8・9)。その場所は、30mほどの幅のせまい舌状の尾根の斜面であって、尾根上に平坦面がある。同時に、その場所からは古代出雲の神「宇夜都弁命」が天降っているという仏経山(標高366m)を望見することができる。

銅鐸を埋めた場所は谷の奥や、丘の頂上にあと一息のところにあるなど、傾向が明らかにある。青銅器の埋納を神への奉納と考えると、神が顕現するような場所の手前で祭りをおこなったあと、埋めたことになろう。銅鐸が見つかった場所が、神岡、神庭西谷(斎谷)、神於、神種、神倉山、岩倉(磐座)、神村、明神谷……と神祭りとかわりのある地名をもっていることも気になる。

3. 象徴で戦う時代

1 銅鐸の鑄造と配布

銅鐸は古くは石製の鑄型で、新しくは土製の鑄型で鑄造した。銅鐸の産地を証明するもっとも確かな証拠は鑄型の出土である。大阪府茨木市東奈良遺跡からはたくさんの石製鑄型が見つかり(図13)、縦型の流水文を施し、大きさはまちまちで、平均的に小さい特徴をもつ銅鐸を造っていたことが明らかになった。その一方、横型の流水文をもち、大きさは規格的で大きな一群は、鑄型はまだ見つかっていない。流水文の特徴から大阪府八尾市亀井付近で造ったと私は推定している。石製鑄型の時期には、摂津と河内に銅鐸生産の中心があり、他に姫路などでも小型の銅鐸を作り、各地の集団に競って配布した(図10・12)。しかし、銅鐸をたくさん生産した東奈良の集団が富を蓄積していた痕跡は見つかっていない。

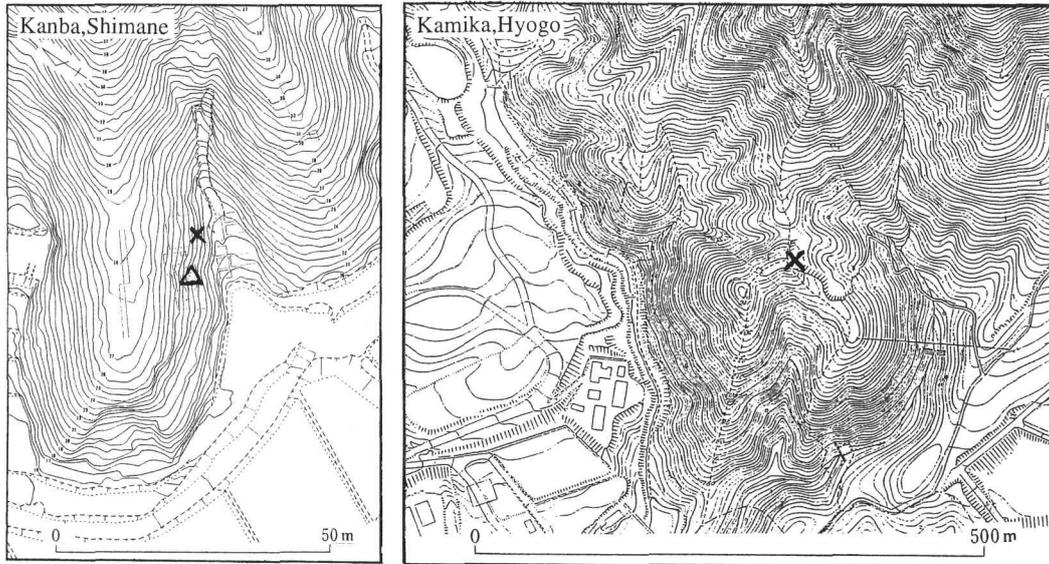
銅鐸の鑄型を作る石材は、神戸北部と徳島で産出する砂岩である(図11)。硬い石の塊を精巧な鑄型に変える作業は大変であった。青銅の材料は大陸に求めていたから、高度の鑄造技術とあわせ、銅鐸の価値はきわめて高いものであった。

土製鑄型は、粘土で外枠をつくり、その内面に粘土を貼り、その上に形と文様を彫り込んだらしい(図13)。奈良県唐古=鍵遺跡から外枠がたくさん見つかっており、ここに土製鑄型の時期の鑄造の一つの中心があったことは確かである。高さが50cmをこすような大型の銅鐸は、土製鑄型の採用によって容易になった。

2 単一化・大形化した象徴

弥生青銅器文化は、青銅器の種類が極端に少ないのが特徴だと述べた。それでも、最初のうちは種類もまだ多かった。九州では銅剣・銅戈・銅矛があり、近畿の影響をうけて少数ながら銅鐸を作ったことさえあった。しかし、まず銅鐸が落ち、次いで銅剣、そして銅戈が消え、最後は銅矛だけになってしまった。

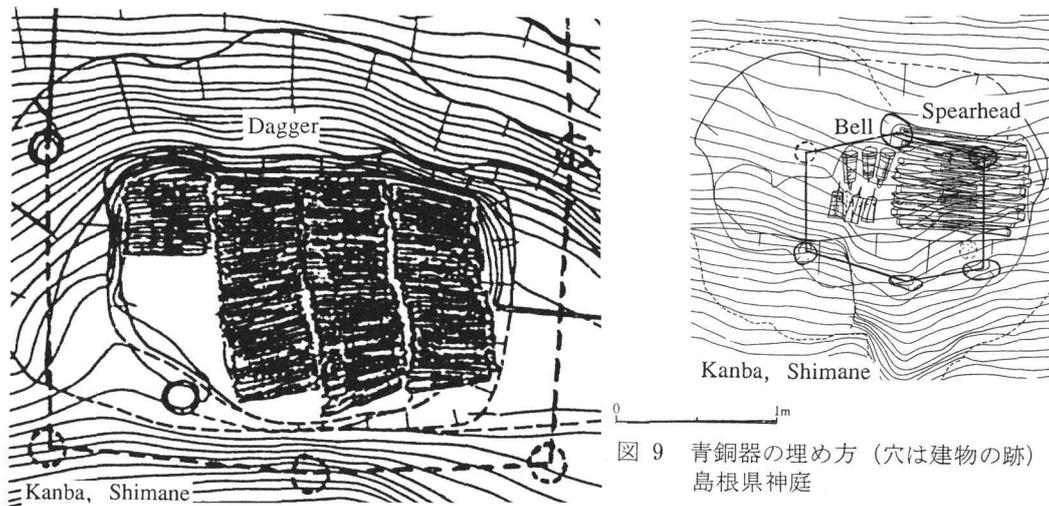
近畿も銅鐸だけでなく、一時期は銅剣を作り、銅戈を作ったことがあった。しかし、最後は銅鐸の生産にほとんど一本化してしまう。愛媛・香川からの出土の多い平形銅剣は、北部九州の中細形銅剣の系譜をひく、祭器としての銅剣である。鑄型がまだ見つからないけれど、分布の中心付近で作っただろうとの推定がある。もしそうだとすれば、北四国では剣形祭器をただ一種類だけ作



島根県斐川町神庭△銅鐸・銅矛×銅劍

兵庫県神戸市神岡 × 銅鐸・銅戈

図8 青銅器の埋納場所 Fig. 8 Sites buried the bronze ritual instruments.



Kanba, Shimane

Kanba, Shimane

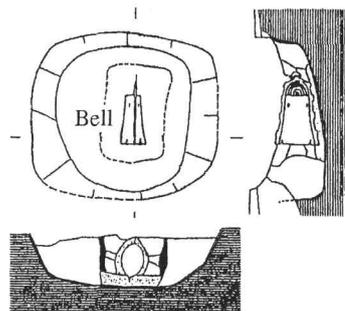
図9 青銅器の埋め方 (穴は建物の跡)
島根県神庭

Fig. 9 Excavated buildings and associated bronze bells and socketed spearheads.

表1 複数個を埋納した銅鐸の組み合わせ

Tab.2 Associations of the various types of the *Dotaku* buried in each sites

	徳島		島根			鳥取	兵庫		滋賀		
	源田	中野	上野	神庭	岩倉	志谷奥	小田	野々間	神岡	大岩山 I	同Ⅲ
I-1式				1							
-2式				1							
II-1式				3	19				2		
-2式				1	11	1	1	1	2		
III-1式				2		1			2		
-2式	2	1			6		1	1	8		
IV-1式	1	1			3					1	2
-2式										1	3
-3式										9	4
-4式											
-5式										1	



大阪府跡部
Atobe, Osaka

ったことになる。

近畿の銅鐸のうち、最古例の出土地不明・東京国立博物館35509号銅鐸は、高さ22.3cm、重さ1.1kg、製作年代は前4世紀代までさかのぼるだろう。それに対して、最新例は滋賀県大岩山Ⅰ-1号銅鐸は、高さ134.7cm、重さ45.4kg、製作年代は2世紀末頃であろう。高さにして6倍増、重さにして41倍増、これが銅鐸の歴史500年間におきた変化である。ちなみに中国の銅鈴は高さ5~9cm、朝鮮半島の銅鈴は9~16cmである。銅鐸の大きさの増大は、銅鐸によせる弥生人の期待の増大を示している。

その一方、九州の銅剣・銅戈・銅矛も大形化する。最古の銅矛は福岡市板付遺跡出土品で、長さ約18cm、重さ約140gである。それに対して最新の銅矛は長崎県黒島出土品で、長さ約90cm、重さ約3.3kgである。最古の銅矛にくらべると長さは5倍増、重さは23倍増しており、大型化の傾向は銅鐸と軌を一にする。互いに刺激しあい、その大きさを競った結果であろう。

青銅器の原料は、銅・錫・鉛からなる。そのうち鉛の同位体の分析によると、最初は朝鮮半島から、後には中国北部からもたらされたという。弥生青銅器の大型志向は、外界からの原料の供給に依存しながらだったとすれば、驚くべきことである。何を代償にして原料を入手することができたのか、大きな問題である。

3 象徴同士の戦い

弥生時代の青銅武器は、当初は武器として用い、個人の墓に副葬していたが、やがて武器としての機能を退化させ象徴化を進めると併行して個人から離れ、丘の斜面などに複数個を埋納する祭器へと変化する。大きな武器、大量の武器は、武力の象徴である。埋納の意味は、危機に際して神に武器を奉納して自分たちを護ってもらおうということであろう。北部九州勢力にとって重要な朝鮮半島に面する対馬、近畿の銅鐸分布圏と接する南四国に福岡・佐賀産の銅矛形祭器が集中的に分布しているのは、1、2世紀の西日本の政治勢力間の緊張した状況を伝えている。人は鉄の武器で、神は青銅の武器で敵勢力と戦ったのである(図14)。

銅鐸は1世紀後半から大型化を進め、2世紀になると、高さが1mをこすものも現われる。鈕に大きな飾り耳をつけ文様には太い突線を加え、威儀を増大させようと努力している。舌を伴う例はなく、鳴らすことを放棄した見るだけの銅鐸である。

そして、高さ134cm、重さ45kg、世界最大の「銅鈴」を作った直後、銅鐸の歴史は終わる。

その一方、それまで銅鐸の分布圏に属していた地域で変化が生じる。島根県加茂岩倉で見つかった銅鐸は、出雲ではもっとも新しい一群を含む。出雲では1世紀の前半に銅鐸の祭りをやめてしまったのである。代わって広島山間部・島根から富山までの日本海側を特徴づけるのは、四隅が突出した方形の墳丘をもつ墓である。その最大例は、方丘の一辺が40mに達する。2世紀後半の出雲市西谷3号墳丘墓は、木槨で木棺を囲い、大量の朱を使ったまさに王墓である。出雲にわずかに遅れて銅鐸の分布圏から離脱する吉備も、2世紀後半に円形の墳丘の二方向に突出部を付けた長さ約80mの倉敷市榎築墳丘墓を造る。埋葬儀式に使った、特殊な胎土・器形・文様をもつ大型・重厚な壺・器台は、吉備を中心に分布し、吉備を象徴する土器となる。

愛知・静岡の東海西部では、1世紀から銅鐸を作り始め、2世紀になると、三遠式銅鐸と呼ぶ銅

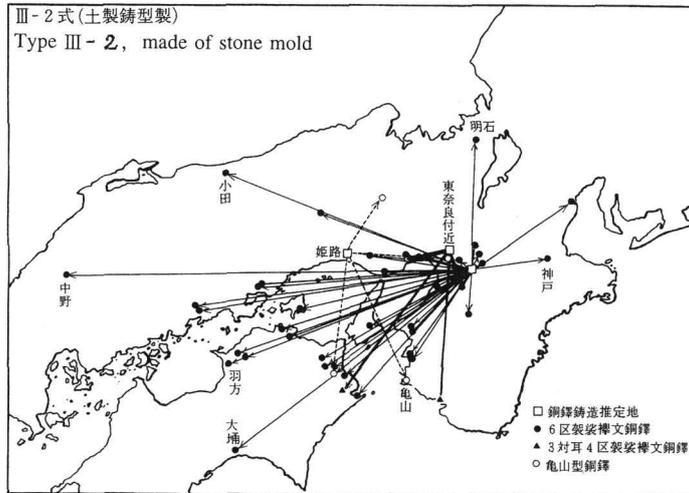
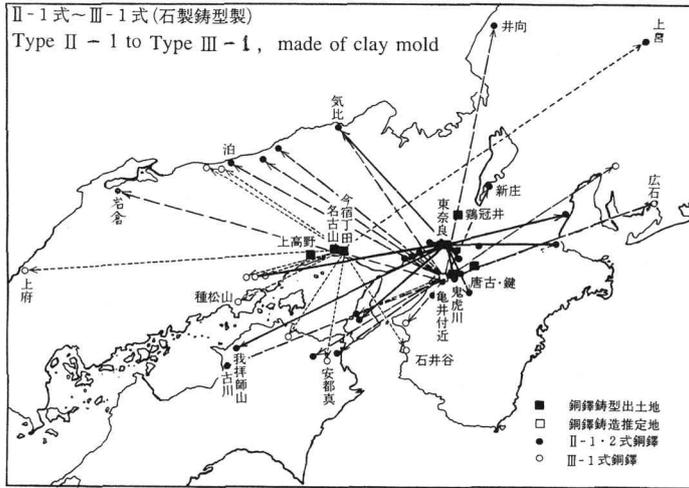


図10 銅鐸の鑄造地と製品の移動推定図

Fig. 10 Bronze bell factory sites and distribution routes of the products.

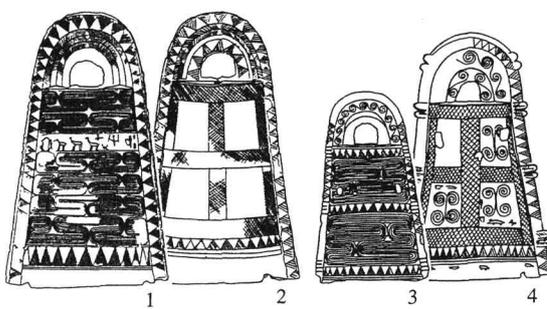
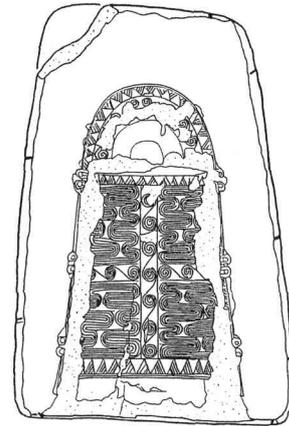


図12 推定河内産(1・2), 摂津産(3・4), 推定大和産(5・6)の銅鐸
Fig. 12 The bronze bells presumably made in Kawachi(1,2);
in Settsu(3,4); and presumably in Yamtato(? 5-6)

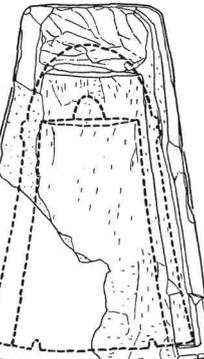


図11 鑄型用石材の分布

Fig. 11 Distribution of raw materials for molds.



1 大阪・東奈良
Higashinara, Osaka made of stone



2 奈良・唐古・鍵
Karako-Kagi, Nara
made of clay

図13 銅鐸の鑄型(1石製, 2土製)
Fig. 13 Molds of the bronze bells

鐸を生むにいたる。内面の突帯は太く、磨滅もしているの、実際に鳴らしたものである。近畿の影響を受けながらも、独自の動きを始めたのである。

2世紀にそれぞれの地方をあらわす象徴となった近畿の近畿式銅鐸の最後は2世紀の終わり頃、東海の三遠式銅鐸と北部九州の銅矛はそれより少し早く最後を迎える。

1～3世紀、弥生後期は、各地の地方勢力が、それぞれ青銅器や墓制に何らかの象徴を見出し競った時代であった。象徴の種類は異なっても、その大ききで競いあった。器物の高さが1mを突破した近畿と吉備、そして巨大な墳丘墓を築き得た山陰、吉備、近畿は次の前方後円墳の時代を先導する強大な勢力として重要な役割を果たした。

魏志倭人伝によると、2世紀の終わり頃、倭国は乱れ、卑弥呼を倭王に共に立てることによって乱は終息したという。銅矛・銅鐸を廃絶させたのは、それらに代わる「倭国民統合の象徴」として卑弥呼が登場し、彼女が配布する銅鏡が倭国と個々の首長との関係をあらわす象徴になったからではないだろうか〔春成 2002〕。その一方、吉備で誕生した特殊壺・器台は、3世紀中ごろには、奈良県箸墓古墳など最古の前方後円墳を飾る埴輪の祖型として採用される。

4 争う象徴同士

銅鐸は、土中にそれだけを意図的に埋めた状態で見つかる。九州では、銅剣・銅戈・銅矛は当初は墓に副葬しているが、やがて埋納するようになる。九州では埋納が始まるのは、熊本など周辺部からである。埋納の主体はどこか。北部九州勢力であった、と私は解釈する。自らの勢力のおよぶ境界付近で祭りをおこない、そこに武力の象徴を埋めることによって、守りをかためようとするのである。銅鐸の埋納の影響と考えてよいだろう。

弥生時代の青銅器は、実用品に出発し、象徴品に転化した。政治的・経済的に対立する相手の出現は、自らの存在を自覚させ、イデオロギー的統合をはかるための象徴を生み出す。したがって、象徴は、それぞれの地域で、独自のものであらねばならず、最終的にはただ一つの象徴に収斂することになる。

敵対する象徴同士は競争をひきおこし、それを異常に発達させる。弥生青銅器では、その競争は、大型化という道をとった。大型品を示すことによって、相手を圧倒しようとする思考である。

北部九州産の銅矛の最後は2世紀後半ないし末、東海地方産の三遠式銅鐸の最後も2世紀後半ないし末、そして近畿式銅鐸だけが2世紀ないし3世紀初めまでのこる。最新式の近畿式銅鐸は三遠式銅鐸の文様の一部を取り込んでいる。近畿の銅鐸鑄造集団が、三遠式銅鐸の製作工人を吸収したことを佐原真は考えている〔佐原 2002〕。あるいは、勝手に象徴を作らないように、九州の銅鐸の製作工人も、近畿勢力は吸収したかもしれない。対立が支配従属の関係におさまると、従属した側の象徴は消滅する。

2世紀末の岡山・鳥根・鳥取では、銅鐸を欠く代わりに、その地域独自の埋葬方式を生みだし、その時期の列島内で最大級の墳丘墓を造っている(図15)。近畿勢力の象徴である銅鐸の祭りを拒否し、新たな象徴を創り出したのである。

このように、列島内で、自らの象徴を選択あるいは創造し大型化して競いあう時期は、同時に地域勢力間で対立抗争をしている時期であった。3世紀の後半、前方後円墳が出現する。それは、こ

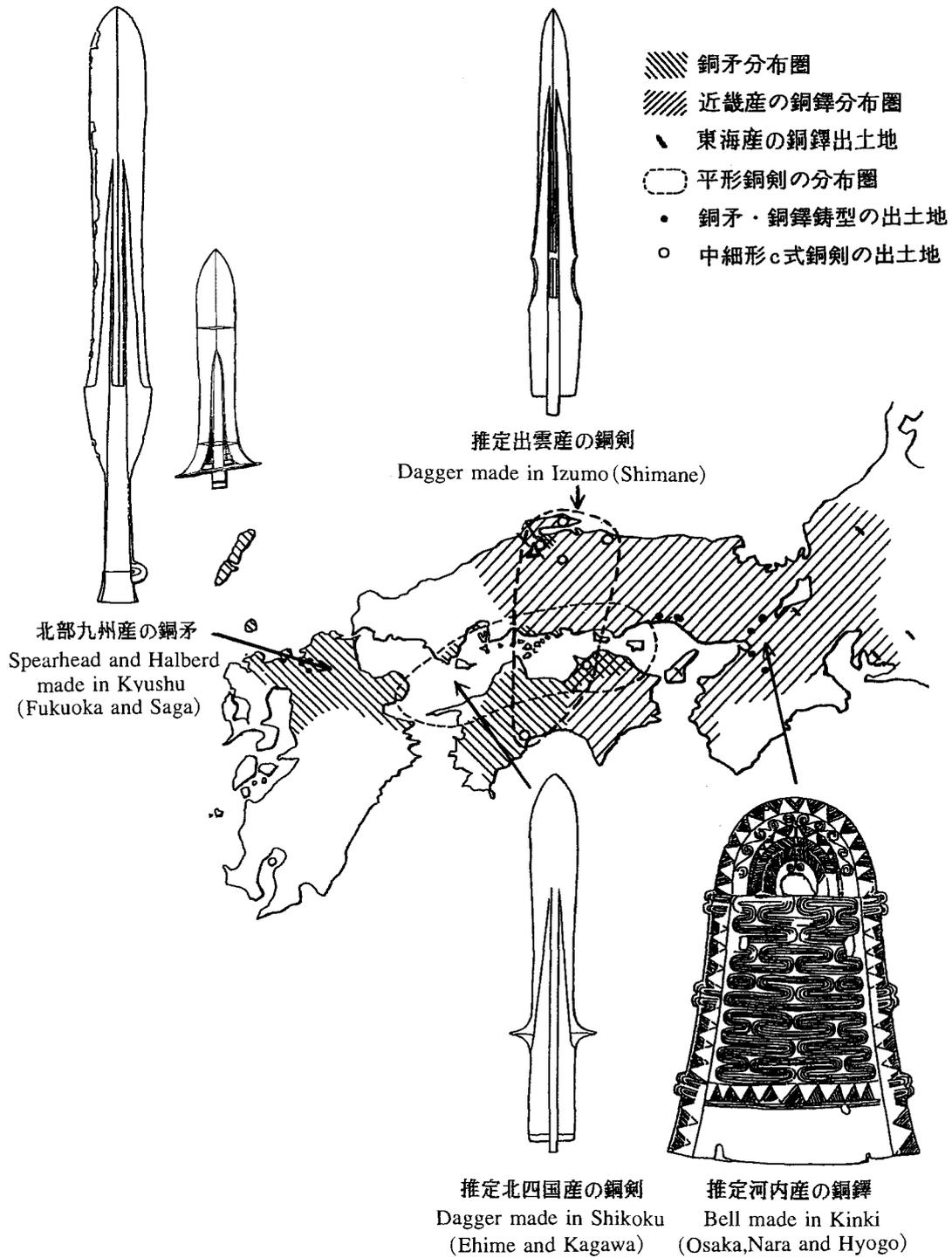


図14 弥生時代の青銅祭器の分布 (紀元1年前後)

Fig.14 Distribution map of the bronze ritual instruments of the Yayoi period (1c.B.C.to 1c.A.D.)

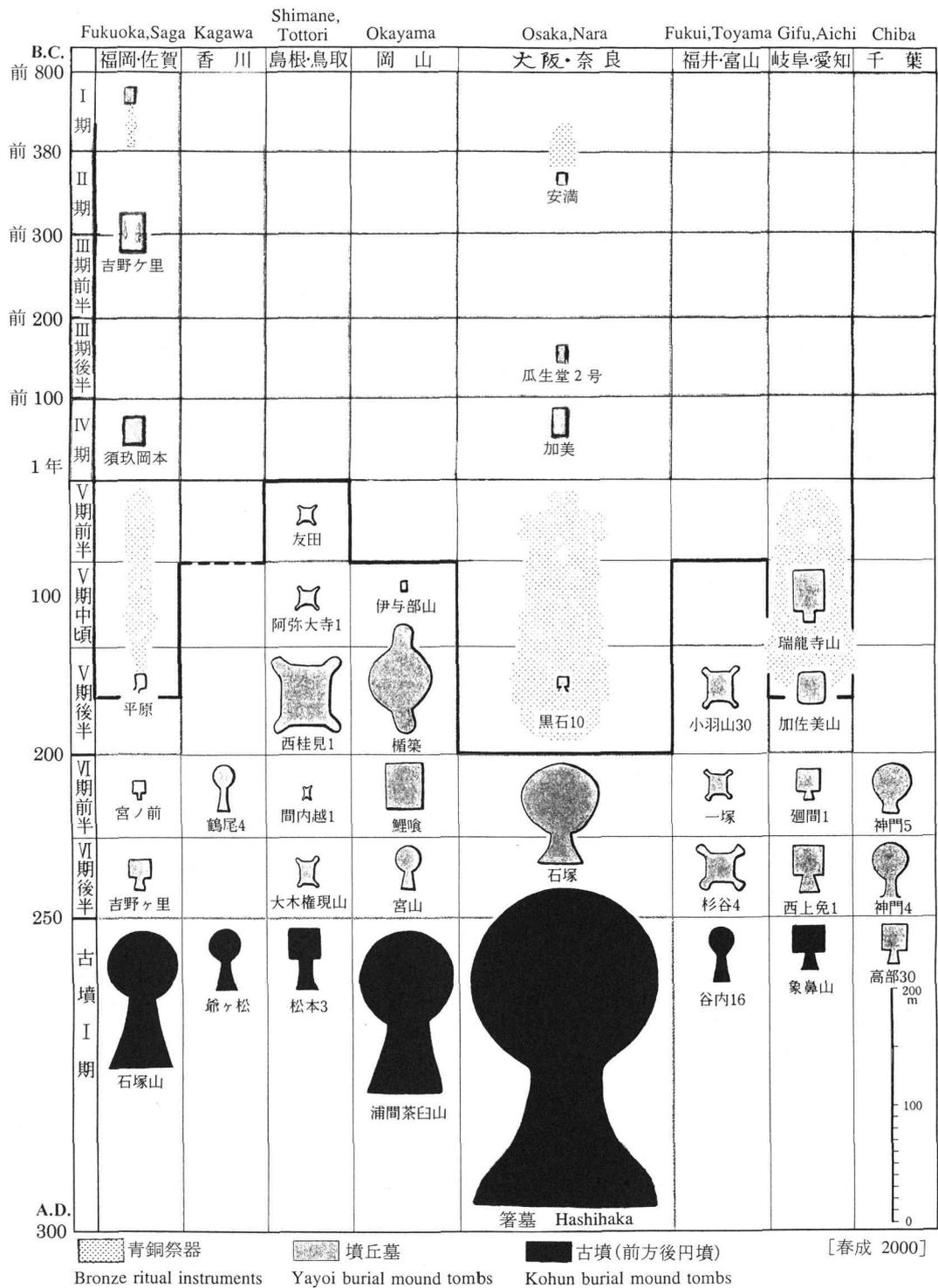


図15 弥生墳丘墓から前方後円墳へ
Fig.15 Changes in the mound burial type from the Yayoi period to the Kofun period.

れまでの各地方勢力の象徴を廃絶あるいは吸収し、新たに創出した倭国の象徴であった。

参考文献

- 金関 恕 1985：「考古学から見た古事記の歌謡」『天理大学学報』第145輯，1～18頁。
甲元眞之 1989：「大陸文化との出会い」『弥生人の造形』古代史復元5，28～48頁，講談社。
佐原 真 2002：『銅鐸の考古学』東京大学出版会。
春成秀爾 1987：「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集，1～38頁。
春成秀爾 2002：「銅鐸と社会」『古代を考える 稲・金属・戦争－弥生－』209～246頁，吉川弘文館。
村上恭通 1999：『倭人と鉄の考古学』青木書店。